

日本海の孤島隱岐の島に就て

柳 樂 義 雄

島根縣に於ける者にして大黒さんを出雲大社に拜し美保の關の惠比須様に御參りせぬ人は無いといつてよい。然しあの日本海の怒濤の眞只中に見捨てられた様な隱岐の島に渡り、後鳥羽、後醍醐兩帝の遷幸の聖蹟を訪ね更に史蹟と傳説とを豊富に持てる島、天然の名勝、學術上の珍奇なる資料を藏し、殊に我等路政に携はる者に關係深き彼の我國に又なき國寶驛鈴を持てる神秘の島に遊ぶ者の尠きは、未だ彼島に對する認識淺きに因る。山陰地方觀光の客は此の「ロマンズ」の國、詩の國、夢の國である隱岐を忘れてはならぬ。筆者は頃日隱岐に旅し、特に此一文を草し廣く讀者の參考に資せむとす。

隱岐は出雲の北東日本海中の一群島にして、四個の大島

と二百餘の小嶼とよりなり、面積二十二方里美保の關より僅に二十三哩の沖合にあり、松江より此島に渡るには歌で名高い松江大橋より毎日午後八時、隱岐汽船會社の五百噸の鋼鐵船が出航し、鳥取縣境港を午後十一時に發し美保關に寄港し、翌早朝隱岐の島に着く隱岐よりも毎日午後八時首都である西郷港から松江行の汽船が出るから、急ぎの時は日歸の旅行も出来る譯である。

隱岐島で何は措いても先づ第一に紹介すべきは後鳥羽天皇行在所遺址、御火葬塚及隱岐神社である。承久三年後鳥羽天皇の朝權恢復の御企圖も水泡と消え、關東武士の都大路を蹂躪するや、一天萬乘の大君は御位を下り給ひて三上皇は遠國の御遷幸のこととなり、承久三年七月十三日後鳥

羽院は鳥羽宮より隠岐へ遷らせ給ふこととなり、同じ月の

二十七

日出雲

の美保

關に着

かせ給

ひ、一

週日御

滞留八

月五日

隠岐國

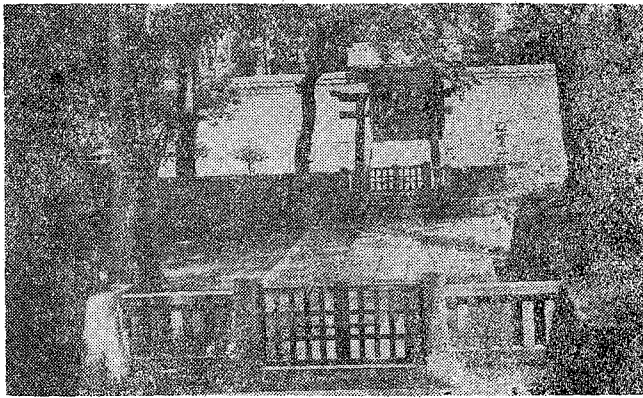
海士村

勝田山

源福寺

に入ら*

の長き間此の絶海の孤島に悲愴の御涙をしぼらせられ、村
上助九郎一家の奉仕の下に憂き世を忍ばせられたのであつ



後鳥羽院上皇御火葬塚跡

*せられ

延應元

年春ま

だ淺き

二月二

十二日

寶算六

十歳に

して崩

御まし

ますま

で、實

に十有

九ヶ年

られ、

都に歸

る術な

きを御

聊たせ

給ひ、

潮酌む

海女の

袖ほす

を御覽

じて御

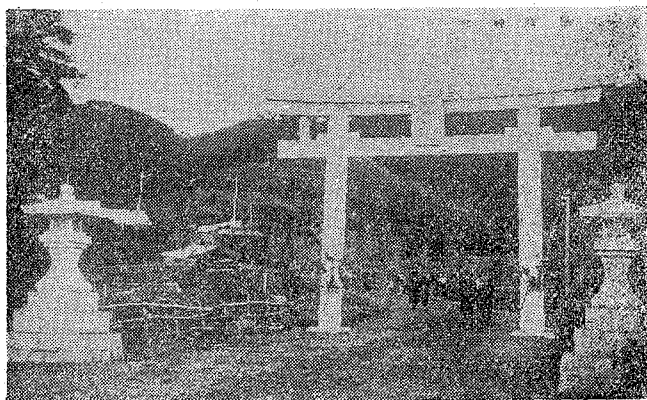
袖の乾

く聞な

きを嘆*

を偲び奉らむ。

た。此十九ヶ年の歲月孤島の御生活煙と霞む島根瀉を齧せ



隠岐神社

*かせ給

ひ、折

に觸れ

時につ

れ、詠

せさせ

られた

る隠岐

百首の

中の二

三を記

して院

の御在

島の様

あらし浪風心してふけ

蛙なく勝田の池の夕たたみ

聞かましものは松風の音

思ひ出つる都の春にかはらしな

勝田の山の花の盛りは

里人は謂ふ院のこの歌により

勝田山の松籟も勝田の池の蛙の

聲も今に至るも聞かじと。

行在所たる源福寺は今は寺院

なく、間口十六間、奥行八間の

本堂址あり、後鳥羽院天皇行在

所趾と題する石柱あるのみ。庭

内雑草生え繁り、勝田の池も荒

廢に歸し茲に参拜する者往時を

追懐し、低徊去る能はざるものあり。

行在所に隣して御火葬塚あり、玉體は二月二十五日火葬

になし奉り、御遺骨は四月二十二日出雲に渡り五月十四日

攝津水無瀬の離宮に着き、翌々日大原の西林院に納め、後

仁治二年二月八日大原法華堂に遷し奉れるもの、今の御陵

である。従つて隱岐の御火葬所は今宮内省の所管として

廻らすに築地を以てし、周圍百二十四間内部は窺ふ能はざ

るものである。府縣道

松江海士線は此築地を

以て終點としてゐる。

隱岐神社 後鳥羽天

皇御登遐七百年祭を迎

ふに當り、其御聖德御

偉業を追慕敬仰すると

共に其聖蹟と保存顯彰

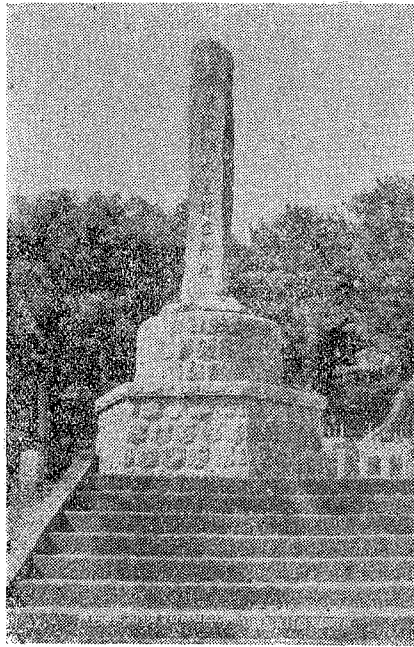
する爲、後鳥羽天皇を

御祭神とする隱岐神社

を海士村御火葬塚附近に造營することとなり、昭和十四年

四月三日鎮座祭を執り行はれ、明年三月末迄には附屬社殿

等一切完成することとなり、目下玉垣樓門等建設中である。

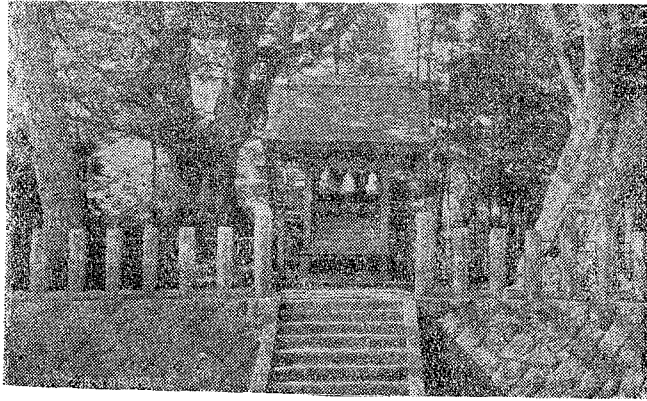


後醍醐天皇行在所跡

曩に大正天皇太子に御在す時又今上陛下皇太子殿下の御時此孤島に聖駕を寄せさせ給ひ、承久元弘の往昔を偲ばせ給ひて、植樹等遊ばされしこと共思ひ合せ、聖慮を拜察し、我等國民は此建武中興の發祥地とも云ふべき此の聖地に參拜し、盡忠報國の誠を誓はねばならぬ。

次に紹介すべきは後醍醐天皇の御遷幸のことである。後醍醐天皇政權復興の偉業も事志と違ひ、元弘二年三月七日北條高時は天皇を隱岐に遷し奉る。大平記に依れば「明くれば三月七日千葉貞胤、小山五郎左衛門、佐々木佐渡判官入道道譽、五百騎にて路次を警固仕りて先帝を隱岐國に遷し奉る……中略……明石の浦の朝霧に遠くなり行く

淡路がた、寄せ來る浪も高砂の、尾の上の松に吹く嵐、跡



神社の祀奉天皇醍醐後

に幾重の山川を、松坂越えて美作や、久米の佐羅山さら／＼に、今はあるべき時ならぬに、雲間の山に雪見えて、遙に遠き峯あり、御警固の武士を召して、山の名を御尋ねあるに、是は伯耆の大山と申す山にて候と申しければ、暫く御輿を止められ、内證深心の法施を奉らせ給ふ。或時は鶏唱抹過茅店月、或時は馬蹄踏砂板橋箱、行路に日を窮めければ、都を御出ありて十三日と申すに出雲の見尾の湊に着かせ給ふ。爰にて御船を驪して、渡海の順風をぞ待ち給ひける」とあり、鳥取縣より我島根縣美保關港に着かせ給ひ、十餘日の御逗留あつて順風を待ち船出あらせられ、四月二日隱岐に御着船行在所に入らせ給ふ。天皇の隱岐の行宮に在らせ

たのである。

緒隱岐行在所に就ては兩説あり、古文書記録上より島後

國分寺説を主張する者と、國碑、傳説、

地名よりする島前黒木御所説とあり、

前者は西郷港より一里中條村池田にあ

り、天平年間聖武天皇の詔勅により建

立せられたる寺院にして、明治二年島

内に起りたる猛烈なる排佛運動の際、

寺院は焼き拂はれ今は礎石を見て往時

を追懐するに止まる。府縣道松江國分

寺線は此國分寺跡樓門の趾迄達してゐ

る。後者は島前黒木村別府港にあり、

隱岐汽船の定期寄港地の小高き丘にあ

り、満山松林に蔽はれた天皇山及其後

方一帯の高丘を指したもので、昭和九

年三月十三日建武中興關係史蹟指定と

同時に假指定となつたもの、隱岐に旅する者は何れも必ず

通るべきコースとなつてゐる。

次は矢張り神社であるが、西郷港より二十丁磯村下西に

ある縣社玉若酢命神社である。境内に

は周圍三丈五尺、高さ十丈樹令二千年

を超ゆるといふ八百杉の巨木があり、

天然記念物として指定せられて居る。

閑話休題話は交通に最も深い關係を

有する驛鈴に及ぶ此天下一品たる驛鈴

は、此玉若酢命神社の祠官億伎國造家

累代の什寶で篤志家には觀覽を許して

ゐる。

驛鈴・印・倉屯國岐隱

驛鈴は上代驛路の人馬徴發の徴證と

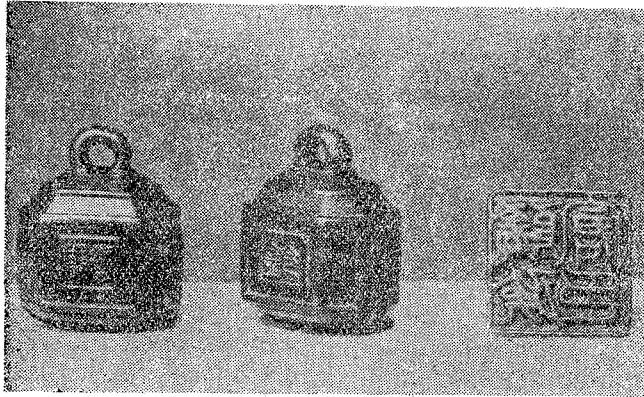
して朝廷より官人に給せられた鈴であ

る。孝徳天皇大化二年正月の詔に驛

馬、傳馬等の諸制を創始すべく命せら

れ驛鈴を給せらる、其の數は上國三

口、中下國は二口とありて、隱岐は下國なる爲二口を給せ



られたるもの、今我國中此の驛鈴の傳はるは我隱岐國にある此二口の國寶あるのみである。

此二口の驛鈴は何れも八稜形にて其の腹と背とに「驛」
「鈴」の文字を一字宛篆體にて鑄出し、其の内一口は四乳足にして量目二百五匁高さ二十八分、短徑一寸八分を有し他の一口には三乳足にて百八十六匁、高さ二十八分五厘、短徑一寸八分共に色澤蒼古清韻眞に掬すべきものがある。

寛文二年光格天皇内裏遷御の儀式に此驛鈴を古式に則り車駕に従ふの儀を以て勅命により驛鈴を徵せらる。國造億岐幸成携へて上京し、儀式畢るや乃ち天皇御手づから鈴音を試み給ひし際、裂きて用ひ玉へし帛片及黄金を賜ひ兼ねて驛鈴を容れて行幸の鹵簿に従へられたる唐櫃を賜ふ。唐櫃は外面朱塗、内面黒塗にして渡金の金具を用る金具には菊花及唐草模様を沈刻し藍色の太き紐を付し、洵爛目を眩する許りなり。共に億岐家に藏し觀覽を許さる。

隱岐に渡る者前叙の聖蹟に參拜し、又玉若酢命神社に詣て億岐家を訪ね、此國寶驛鈴を拜觀せざれば渡島の價値な

からむ。

話は餘りにも固き方面のみに行きしが、若しそれ名勝史蹟の類を擧げむか、先づ布施海岸、知夫黒瀉、國賀及向島海岸の名勝、明神の松、くろきつた、高尾駿地の潤葉樹林、大水風鳥畜殖地等國法に依り指定せられたるもののみにても十四種の多きに及び、又國幣中社水若酢神社、縣社焼火神社あり、就中黒木御所下の海中に繁殖する海藻くろきつたは綠藻植物の管藻類中いはつた科に屬し、我國にて初めて發見せられしは、明治四十三年九月理博岡村金太郎先生に依つて此の黒木御所下に於て發見せられ、和名なかりしを以てくろきつたと和名を附せられし珍奇なるもの、又島前浦郷の國賀海岸の摩天涯島後向島の奇巖怪礁亂立して青松之を彩つて翠影を浮め、風光秀絶眞に入をして歸るを忘れしむるの絶景である。

名物名産として擧ぐべきものに鬮牛、牧畑、ドツサリ節、石楠木隱岐風蘭の盆栽馬蹄石細工又錫等何れも地方色豊かなるものである。

鬪牛は後鳥羽院が勝田の郷に向はせらるゝ途中山腹に戯れる牧牛を見そなはせられしに端を發し、郷民が院の御心を慰め奉る爲に牛を鬪はせ觀覽に供へたものが起原と稱せられ、常設の鬪牛場が三ヶ所もある。又隱岐の牧畑は獨逸の三圃農場にも優し四圃農場にして牧場と畑作を輪番に四年交代にて一巡すると云ふ極めて興味ある農場經營法である。

隱岐獨特の民謡ドツサリ節は柔筆のよく言を盡す能はざるものがあるが、此歌にからむローマンスの一端を紹介すれば、今より約七百年前島前知夫里の寒村にお松と曰ふ村切つての美しい女があつた。上り下りの帆船は飲料水や食料を積み一月も二月も此浦に風待ちするのが常であつた。新潟下りの一青年は斯うした度毎にお松を訪れるのが常であつた。お松は此青年の微妙なる追分節に心から酔つた。然し此二人の幸福の日も順風の訪れで再會を約して淡い夕日を浴びながら海上の人となつた。夫れから二年たつても三年たつても青年は二度と此お松の前に姿をば現はさな

つた。お松は青年の殘し置きし三味線を胸に抱いて、日頃聞き覚えし追分を唄つて悶々の情を慰めて居た。此歌が咽ぶが如く泣くが如く又訴ふるが如くやる瀬なき想への凡てを漉へて波間に消え行くのであつた。此追分節も歌はむとして歌ひ得なかつたお松の唄が固定して、今は隱岐獨特のドツサリ節となつたのである。踊りもついてゐて一種特有の島國的聲調は餘音翳々、潜然として涙の下るを覺ゆるのである。原詠の代表的たる二、三を擧げて隱岐紹介の筆を擱く。

○こよい一夜が名殘の港

あすはいづこで梶枕 離れともなや隱岐の島

○隱岐の名物色々あれど

鰯、材木、馬と牛 牛の角力にドツサリ節

○忍び出様とすりや鴉めがつける

未だ夜が明けぬにガワ／＼と憎くや八幡の森鴉